韓国における桧巖寺跡の僧堂遺構について

—東アジア禅宗史から見て—

A STUDY ON THE REMAINS OF THE MEDITATION HALL OF
WHOE-AMSA TEMPLE, KOREA

—From the view-point of the history of the Zen Buddhism in East Asia—

韓 志 晩*

Jiman HAN

The purpose of this study is to clarify the character of the remains of the meditation hall (僧堂) of *Whoe-amsa* (桧巖寺) temple in Korea, through a comparative research between Japan, China and Korea. This study also aims at defining its relationship to China and Japan of the 13th-14th centuries. *Whoe-amsa* temple was an extremely large Zen Buddhism temple, known for having been rebuilt by the Zen priest *Na-ong* (瀬翁) in the 14th century, the last years of the Koryo Dynasty. In that time, Zen Buddhism prospered throughout East Asia, not only in Korea but also in Japan and China. *Na-ong* had gone to China to study Zen Buddhism during 10 years. This research brought out three important results: the first is that the remains of the meditation hall of *Whoe-amsa* temple was a typical meditation hall of a Zen Buddhism temple of that time. The second is that the meditation hall of *Whoe-amsa* temple followed the system of Zen Buddhism temples of China, especially in its location within the temple and its spatial composition. The third result is that the hall also presents characteristics of Korean architecture, that are different from those of Chinese architecture. A representative such characteristic is the under-floor heating system. Some differences with Chinese architecture could be found not only in the meditation halls of Korea, but also in those of Japan. This study proves to be essential for the understanding of Zen Buddhism temples of the period, not only in the Korean context, but for the whole area of East Asia where Zen Buddhism flourished.

Keywords : comparative research, East Asia, Zen Buddhism temple, Koryo dynasty, *Whoe-amsa* temple, meditation hall

比較研究、東アジア、禅院、高麗時代、桧巖寺、僧堂

1. はじめに

現在韓国で発掘調査が進められている桧巖寺跡は、高麗時代(918-1392)末の禅宗寺院を代表する大規模な禅院である。当時の禅宗は、韓国のみならず日本(鎌倉・室町時代)及び中国(南宋・元代)など東アジア諸国でも広く普及していた。また各国の間には活発な交流があり、そのなかで仏教文化の交流も継続的に行われていた。

このような歴史的背景は、13-14 世紀頃の日・中・韓における寺院建築、特に禅院に関する新たな研究方法の可能性を提示する。即ち、三国共に当時の禅院伽藍の建物がほとんど残っていないという現実的な制約を乗り越える研究方法として、三国間の比較研究が考えられる。これは特に、当時三国で共通して盛んであった禅宗仏教の舞台である禅院建築において、非常に有効な研究方法であろう。

しかし、これまでの韓国では高麗時代の禅院建築は勿論、寺院建築そのものに対する研究もあまり行われていない¹⁾。これは現存する建物と関連史料が少ないことが主な原因であったが、その限界を越えられる研究方法論の不在も重要な原因として指摘できよう。また、その研究方法論の不在は、周辺の日本や中国などの建築史関連史料や研究成果に注目しなかった結果でもあるだろう。

本研究の目的は、韓国の高麗時代末の禅宗伽藍である桧巖寺の僧堂の遺構を対象として、当時の日本と中国における禅院の僧堂との比較検討を通して、その性格を明らかにすることである。またこの

研究は、韓国においては、国内に現存する建物と史料のみに依存してきた既往研究の限界を越え、また東アジア建築史においては、日本と中国を中心として行われてきたこれまでの研究の地平を広げるという点にその建築史的意義がある。

2. 高麗時代末の桧巖寺と僧堂

2-1 瀬翁による桧巖寺の大復興

桧巖寺の創建年代は不明であるが、1174 年に金(1115-1234)の使臣が立ち寄ったという記録²⁾があり、12 世紀以前から存在していたことは確かであろう。その後、桧巖寺は 14 世紀後半に瀬翁(1320-1376)によってほぼ再建と言えるほどの大拡張が行われる。

瀬翁は桧巖寺を復興する以前、1347 年から 1358 年まで約 11 年間元(1206-1367)に留学した。瀬翁は元に滞在していた時、大都(現在の北京)の法原寺、広済寺以外にも、南宋時代(1127-1279)における禅宗の中心地であった江南地域の平江府(現在の蘇州)の休休菴、明州(現在の寧波)の阿育王寺、臨安(現在の杭州)の浄慈禅寺などを訪れて修学し、またそこで千巖元長(1284-1357)や平山処臨(1279-1361)などの臨済宗禅師とも交流した。その中で特に阿育王寺と浄慈禅寺は、それぞれ南宋五山の第三位と第五位に属する重要な大禅院であった点が注目される。

瀬翁は帰国した後の 1371 年に王の顧問格である王師³⁾になり、1

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
博士課程・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

374年から桧巖寺の住持になって伽藍の大復興工事に着手した^{註4)}。工事は1376年まで続けられ、一新された桧巖寺の姿は李穡(1318-1396)が記した「天宝山桧巖寺修造記」(以下「修造記」と略称する)によく描写されている^{註5)}。伽藍の規模を考慮してみると3年に満たない工事期間はやや短い感がある。また朝鮮時代(1392-1910)に入ると、初期から数回の修理が行われた^{註6)}。さらに1472年には建物の基礎が堅固ではないという問題が提起され、伽藍全体にわたって各殿堂における基壇の側面の石を補強する修理が行われた^{註7)}。しかし、当時の修理によって伽藍配置や殿堂の形態は変化しなかったようである^{註8)}。それ以降の沿革は明らかではないが、『朝鮮王朝実録』の記事によると、1595年以前にすでに廃寺となっていたと考えられる^{註9)}。

瀬翁が活躍していた14世紀の高麗では、中国と同様に禅宗(臨済宗)が盛んであり^{註10)}、彼は桧巖寺を一新する前に自ら中国に行き現地の禅宗に接し禅院の制度を直接経験してきた。このような歴史的な背景は、再建された桧巖寺の伽藍制度が当時の中国における禅院のそれと関連性があると想定する根拠になる。

2-2 桧巖寺跡の僧堂遺構

李穡の「修造記」によると、瀬翁が再建した桧巖寺には、僧堂と見られる建物として、「西僧堂」・「東雲集」・「西雲集」の三つが見られるが、その中で本論文では「西僧堂」を中心として考察する。

写真1 桧巖寺跡の僧堂遺構
(「楊州桧巖寺址3次発掘調査-現場説明会資料7)より)

現在までの発掘調査によると、「西僧堂」は仏殿跡の西側で発掘された遺構であると推定されている^{註11)}。仏殿に向かって東に面し、平面の形態は、南北に長い長方形の建物が東西に並び、この二棟を廊状の建物が連結しており、全体的にH字型を成している。

まず西側の遺構は、桁行7間、梁行4間で、正面と背面の中央には出入口があったと推定される。内部にはE字型の平面を持つオンドルが南北に相対して設けられている。オンドルの幅は190cm程度であり、焚き口は南と北の二箇所に設けられている。南側の焚き口は基壇中央の垂直面に、北側の焚き口は基壇上面に造られている。そのため、北側に桁行き1間分の底を付加し、焚き口部分を覆ったと推定される。ただし、この部分の周囲に壁は造られなかったようである。煙突は西側の基壇の外側

図1 僧堂遺構の推定復原図
(■: オンドル、▲: 焚き口、□: 煙突、上が北、図面: 筆者作成)

写真2 桧巖寺跡状況と僧堂遺構の位置
(「楊州桧巖寺址7次発掘調査-現場説明会資料21)より)

で発見されている。

韓国特有の暖房方式であるオンドルは、13-14世紀頃には韓国内で普及していたので^{註12)}、桧巖寺が再建された時、オンドルが採用された可能性は十分認められる。また、僧堂の遺構から増築や改修の痕跡が見つかっていない点^{註13)}や、オンドルの造り方、用いられている材料^{註14)}、礎石との関係^{註15)}などからも、このオンドル遺構は、14世紀末に桧巖寺が再建された当時のものであると考えられる。

東側の遺構は桁行5間、梁行1間で、やはり正面と背面の中央間に出入口があったと推定され、この柱間の幅は西側棟のそれと一致している。内部には中央の一間以外の部分に、周りの壁に沿って壇を設けた痕跡が発見された。しかしこの壇は西側の遺構とは異なり、オンドルは設けられておらず、壇の幅も約100cm程度で狭い。

東西の各棟を連結する部分は、一間四方で、南北の両側は外部空間になっている。またその基壇面では壁を造った痕跡が発見されおらず、外部空間に接する部分に壁はなかったようである。しかし基壇の状態を見ると、これと東西棟の基壇が繋がっており、さらに基壇面のレベルも一致している。よって、東西棟の間は屋根で繋がれ、全体として屋根の平面形状がH字型をなす一連の建物であったと考えられる。

桧巖寺は、朝鮮時代の前期まで寺院として機能していたため、現状の遺構がいつの時代の状態を示しているのかが問題となる。上述したオンドルから見ると、基本的な平面構成は創建当時の形を留めていると思われるが、東・西棟の間の遺構においては、特に南北の外部空間に面している部分に壁があったかどうかは、まだ不明である。

一方、14世紀に瀬翁が一新した桧巖寺の伽藍配置に対しては、発掘調査以前からも李穡の「修造記」に基づいた復原研究がいくつかなされている^{註16)}。それぞれの復原案は、相互に多少異なる部分があるものの、僧堂の位置については、「修造記」に記されている「西僧堂」という名称の通り、仏殿の西側であるという点で一致している。さらに発掘調査の成果によると、発掘された伽藍の配置は、「修造記」に記されている14世紀の状況とほぼ一致していることが明らかになり^{註17)}、「西僧堂」の位置も確認された。

ところが、現在まで発表されている発掘調査の成果によると^{註18)}、この遺構は西側と東側を別の建物と考え、それぞれ「修造記」に記されている「西僧堂」(西側)と「穿廊」(東側)に比定されている。しかしここには、次のような基本的な事項に対する検討が欠如していることを問題点として指摘したい。即ち、この遺構が14世紀に建てられた禅院の僧堂であるという点、また当時の高麗及び周辺国における仏教の状況と瀬翁の経歴、さらに当時の中国と日本における禅宗伽藍と僧堂の建築的特性がそれである。

3. 13-14世紀の中国及び日本における禅院の僧堂

3-1 中国の禅院と僧堂

禅院における僧堂とは、堂の中央に聖僧を安置し、周囲に単(坐牀)を設け、坐禅を中心に食事から睡眠までの一切の生活が行持される道場であり、他宗の寺院に対して禅宗伽藍を特徴づける建築物の一つである^{註19)}。

瀬翁が桧巖寺を復興した14世紀後半は中国の元代にあたるが、中国において、当時の禅院伽藍と僧堂を保持している寺は現存してい

ない。しかし、現存する幾つかの史料を通して当時の禅院伽藍の制度や建築状況はある程度把握できる。13世紀中頃の南宋末頃に日本人の入宋僧が記録したとされる^{注20)}、いわゆる「五山十刹図」^{注21)}と各種の清規^{注22)}がそれである。またこのような史料に基づいて、南宋・元代の中国及び同時期の日本における禅院伽藍の制度と諸堂の建築状況を分析した代表的な研究として、横山秀哉の研究が挙げられる。

ここでは、「大宋名藍図」(妙心寺蔵)に掲載されている径山寺(南宋五山の第一位)の僧堂図(図3)に基づいて、13-14世紀の日本と韓国の禅院建築に影響を及ぼした南宋時代の禅院における僧堂建築について考察する。この図は具体的な建築形態より、堂内における什物の配置や僧の座など、僧堂の制度や使い方を明記した記録であるとみられるが、基本的な平面の形は推定でき、重要部分の寸法も書き込まれているため、平面構成、規模、使い方などの分析は可能であると考えられる。

図2 靈隠寺配置と僧堂位置(「大宋名藍図」、上が北)

まず、禅院における僧堂の位置は、仏殿の西側に東面して建てられることが基本である(図2)。平面は前(東)と後(西)の二部分から成り、それぞれ外堂と内堂と呼ぶ。正面以外の北・西・南の三面周りに庇が付いている。内堂と外堂を繋ぐ部分は明楼と呼ばれ、明楼の南北両側は明堂(「天井」と書かれている)という外部空間になる。

このような僧堂の構成は、元代の東陽徳輝が著述した『勅修百丈清規』(1338年)所収の「十六板首鉢位之図」^{注23)}(図4)とほぼ一致し、宋・元の間には大きな変化はなかったと考えられる。この『勅修百丈清規』は、1346年入元した高麗の普雨(1301-1382)が、1348年に持ち帰り刊行したものである^{注24)}。

内堂は一般の衆僧が坐禅、食事、睡眠を行う空間である。桁行9間、梁行4間で、

図3 径山寺僧堂の平面図
(「大宋名藍図」、上が北)

図4 「十六板首鉢位之図」
(『勅修百丈清規』、上が北)

前・後面中央の1間は出入口になる。中央に聖僧が安置され、その周りに長連鉢位の単が設けられる。聖僧を中心としてその前方を前堂、後方を後堂、聖僧に向って右側を上間、右側を下間と呼ぶ。また内堂・外堂の単をそれぞれ内単・外単と呼ぶ。単の上面には夏は蓆、冬には氈を敷く^{注25)}。単の奥行は7尺で^{注26)}、そのうち敷物を敷いている部分が6尺、前端部の鉢縁部分が1尺である^{注27)}。特に鉢縁部分を「三浄」とも呼ぶが、それはここに食事の時に鉢盂(食器)を展げ、寝る時には袈裟を置き、頭を向ける清浄にしておくべきところ、という意味である^{注28)}。単の奥には袈裟、鉢盂、寝具を収める函櫃が設けられる。聖僧の後には、冬の暖房のための丸い囲炉を設ける。一方、重要な寸法も書き込まれており、桁行の柱間が「二丈六寸」(中央間は不明)、梁行が「二丈四尺六寸」、柱の直径が「一尺四寸」であり、桁行方向の単と単との間隔は「七尺二寸五分」と記入している。

「大宋名藍図」には径山寺僧堂の内単を詳しく描いた図もある(図5)。これは外壁に沿う単の立面である。特に奥の函櫃と窓の形が詳細に描かれ、寸法も書き込まれている。単を支える足の高さは「一尺六寸」、単の上面には八つの『千字文』の字が書かれており、各僧の坐位を示している。なお各坐位の後には函櫃一つと窓一枚が設けられる。函櫃は幅「二尺二分」、深さ「二尺六寸三分」、高さ「二尺二寸」で、窓一枚の幅は「二尺五寸」と書かれている。窓の上には、左右両端と中央の三ヶ所に組物が描かれているが、両端部と中央のものでは形が異なっている。

この図によると、各坐位の幅は後の窓一枚分幅に当たり、即ち一人分の単位の幅が、窓一枚の幅と同じ二尺五寸ほどであることがわかる。また八枚の窓全体の長さの二丈は、内堂の桁行一間の二丈五寸とほぼ一致しており、桁行一間には八つの坐位が設けられていたことが分かる。そうすると、窓上の中央に描かれている組物は、中備を表現したものであると考えられる。

また、これらの記載情報から、内堂に収容できる衆僧の人数を概算することができる。まず、桁行方向の単は、8(人/間)×3(間)×16(単)で384人となる。南北の両端部にある梁行方向の単の長さは、南北合せて196.8尺(柱間24.6尺×4間×2)となり、それを2.5尺で割ると約78人となる。これらの全体を合せると、全体で約462人の衆僧を内堂に収容できたと考えられる。

図5 径山寺僧堂の単(「大宋名藍図」)

外堂は、桁行11間、梁行2間で、桁行の間数が内堂より多いが、その全体の長さは内堂と同じである。外堂とは、知事や頭首など寺務運営の担当する役僧^{注29)}や、内堂に入ることか許されない暫到(客僧)などが坐禅と行鉢を行う場所である^{注30)}。役僧は睡眠を外堂ではなく各々の寮舎でとるため、外単は深さ三尺の狭床であり、函櫃も設けられなかった。役僧の中でも、知事は上間(北側)、頭首は下間(南側)の単に坐ることになる。

明楼と明堂は、広い室内の採光のために、内・外堂の間に設けられたものとされる^{注31)}。明楼は、その屋根が内・外堂より高い形態を持つ構造であると考えられる。明堂は、明楼の左右(南北)に設けられる中庭であり、「大宋名藍図」の径山寺僧堂平面図に「天井」と記入されている部分がそれに当たり、その幅は「一丈二尺」と書かれており、「勅修百丈清規」の「十六板首鉢位之図」には「明堂」と書かれている。一方、明楼と明堂は、必ずしも全ての僧堂にあったわけではない。「大宋名藍図」の靈隠寺僧堂平面図と天竜寺配置図の僧堂には、明楼と明堂のいずれも見られない。

3-2 日本における中世禅院の僧堂

日本における中世僧堂の建築構成を把握できる史料としては、鎌倉末期にあたる1331年の建長寺伽藍を描いたとされる「建長寺指図」^{注32)}(図6)が代表であり、ほかにも、1360年代の建仁寺の状況を描いた「東山往古之図」^{注33)}(図7)、14世紀末の南北朝時代に再建された東福寺伽藍の状況がわかる「東福寺伽藍境内之図」^{注34)}(図8)、応仁年間(1467-1468)以前の天竜寺伽藍の中心部を示す「天竜寺古来之図」^{注35)}(図9)などが挙げられる。このうち建長寺は鎌倉五山の第一位であり、天竜寺、建仁寺、東福寺は、それぞれ京都五山の第一位、第三位、第四位にあたり、これらは日本の中世禅院を代表する禅院であるといえる。

日本の中世禅院が当時の中国の禅院と深く関連付けられているのは、既によく知られている。建長寺の開山は1246年に南宋から来日した蘭溪道隆(1213-1278)であり、京都の最初の禅院である建仁寺を創立した栄西(1141-1215)は、1202年に建仁寺を創立する以前、二回にわたって南宋に留学した。また1236年に発願された東福寺は、南宋で禅を修め1243年に帰国した円爾弁円(1202-1280)によって禅院に転換された。「五山十刹図」が日本国内に齎されたのも、当時中国の禅院制度を積極的に導入しようとする態度を語るものである。

図6 建長寺僧堂「大徹堂」
(「建長寺指図」、
関口欣也『五山と禅院』より)

図7 建仁寺僧堂「大悟堂」
(「東山往古之図」、太田博太郎『社寺建築の研究』より)

図8 東福寺僧堂
(「東福寺伽藍境内之図」、太田博太郎
『社寺建築の研究』より)

図9 天竜寺僧堂
(「天竜寺古来之図」、太田博太郎
『社寺建築の研究』より)

上で挙げた指図によると、いずれも僧堂は、中国と同じく仏殿の西側に東面して建てられる(図10)。平面構成は、建長寺僧堂が中国の径山寺僧堂に最も類似し、内堂と外堂の間に明楼と明堂(中庭)があり、堂の北・南・西の三面に庇が付いている。他の三つの例には明楼と明堂がなく、外堂の形も建長寺僧堂と異なっている。

図7の建仁寺僧堂は、概略的な平面形と単の配置しか示していないが、計16版(単)の坐牀のうち第15・16版が、堂の前面の「外堂」と書かれている部分に置かれている。一方、東福寺と天竜寺の僧堂には、建長寺僧堂のような明楼・明堂はなく、外堂の形も異なっており、

また僧堂の四面全体に庇が取り付けられている。これらとの比較により、建仁寺僧堂も、周りに庇が廻され、そのうち前面の庇部分に単を設けて外堂として使用したと推定される。さらに東福寺と天竜寺の僧堂には、外単は描かれていないが、建仁寺僧堂と同じ形式であったと推定できる。なお、明楼と明堂は、中国と同じように僧堂における必須の要件ではなかったようである。

僧堂の規模は、内堂を中心としてみると、建長寺・東福寺・天竜寺僧堂においては、いずれも桁行7間、梁行4間の規模をもつ。建仁寺僧堂図には、「七間ノ中設十六版」と書かれているが、その「七間」は僧堂の桁行の間数であろう。またこれらの指図から僧堂の寸法と単の配置が知られる建長寺、天竜寺、東福寺僧堂については、収容可能人数を概算した研究^{注36)}がある。概算方法は、単の総長を一人当たりの幅で割ることであり、一人当たりの単の幅は、3尺と2尺の二つの条件を設定して計算している。その結果を内単に限定して見ると、まず内単の総長がそれぞれ312尺(建長寺)、368尺(天竜寺)、389.1尺(東福寺)^{注37)}であり、それを3尺^{注38)}で割った結果は、104人、123人、130人となった。これを径山寺僧堂と同じように一人当たり2.5尺で計算すると、それぞれ124人、147人、156人となる。

単の配置^{注39)}は基本的に中国の僧堂と同じである。単の幅においても「建長寺指図」では、外堂の単が内堂の単より狭く描かれており、一般の衆僧と役僧という使用主体による機能の差異が示されている。また、建仁寺の「東山往古之図」には、諸知事寮、都督寮、知客寮、書記寮、維那寮など、僧堂で睡眠をとらない様々な役僧の寮が見られ、やはり中国の禅院の僧堂制度に忠実に従ったことがわかる。

しかし、天竜寺・東福寺の僧堂のように、僧堂の周りに庇を廻らせ、そのうち前面の庇部分に単を設けて、外堂として使用する形態は、中国における禅院の僧堂と異なる点^{注40)}であると理解したい。

4. 比較考察

以上、14世紀末に再建された松巖寺の僧堂遺構と、文献史料および絵画史料に基づいて、その頃の中国と日本における禅院の僧堂について考察を行った。発掘遺構と史料との間には、それぞれから得

図10 建長寺配置と
僧堂の位置(「建長寺指図」、
関口欣也『五山と禅院』より)

られる建築情報の性質に多少差はあるとしても、相互間の比較は、特に関連史料が少ない桧巖寺跡の僧堂遺構の分析において極めて有効な方法であり、さらにこの比較によって、相互の欠如している部分を補うこともできると考えられる。

まず、以上で考察した13-14世紀頃の中国と日本における禅院の僧堂をみると、現在韓国で「修造記」の「西僧堂」と「穿廊」にあたと各々推定されている桧巖寺跡の遺構は、内堂と外堂、明楼と明堂をもつ典型的な禅院の僧堂の遺構であるといえる。これ以外にも、三国の僧堂には、次のような共通点および差異が見られる。

共通している点から見ると、いずれも僧堂の位置が仏殿の西側に東を正面にして建てられること、また堂の規模においては、桁行7間ということが注目される。「大宋名藍図」の径山寺僧堂は桁行9間であるが、同図の靈隠寺僧堂平面図と天童寺配置図には、桁行7間の僧堂が描かれている。さらに内堂に限ってみると、桧巖寺跡の僧堂遺構が桁行7間、梁行4間であり、日本の建長寺・東福寺・天竜寺僧堂と一致している。即ち桁行7間の僧堂は、当時の東アジア三国の禅院における僧堂の標準的な規模だったようである。

堂内の単の配置方法も、三国で同じ様相を示しており、単の奥行についても、桧巖寺跡の僧堂遺構の場合、内単(190cm)が外単(100cm)より広い。内単の奥行は6尺^{註41)}程度になるが、単上の前端部に1尺幅ほどの牀縁が突き出てあった可能性も考えられる。内単と外単の奥行の差は、それらの機能の差異によることで、「修造記」には入室寮、侍者寮、首座寮、書記寮、香火寮、知藏寮、悦重寮、副寮、都寮、知賓寮、典座寮、園頭寮など、僧堂で睡眠をとらない様々な役僧の寮舎が記されている。

一方、再建当時の桧巖寺僧堂の収容可能人数も推定できる。ここでは内堂に限って概算してみる。まず単の総長は、桁行単の総長が777.6cm(上間2間分の長さ)×4+780.9cm(下間2間分の長さ)×4で6,234cmになり、梁行単の総長が1174.8cm(内堂の梁行長さ)×2で2,349.6cmになり、両方を合計すると内単の総長は8,583.6cmになる^{註42)}。これを一人当たりの幅を3尺(93.3-94.2cm)として割ると約91-92人、また2.5尺(77.75-78.5cm)として割ると、約109-110人、という内堂の収容可能人数が算出される。

次いで、三国の僧堂の間で、それぞれ異なっている部分を検討する。その中で最も注目されるのは、堂内の暖房方式である。桧巖寺跡の僧堂遺構の場合、内堂の単がオンドルとなっていることに対して、中国の僧堂では囲炉が設けられている。日本の場合も、中国と同じであったと考えられる。一方、桧巖寺僧堂の外単にはオンドルが設けられてないが、これは、上述したように、ここが自らの寮を持つ役僧が坐禅と食事のみをすることであったためである。

明楼と明堂は、当時の禅院の僧堂で必ず備えるべきものではなかったが、形も国それぞれで異なっている。まず明堂は、中国の径山寺僧堂と日本の建長寺僧堂の場合、内堂と外堂、庇によって完全に囲まれていることに対して、桧巖寺跡の僧堂遺構は、内堂と外堂の桁行間数が異なり^{註43)}、堂の周りに庇もないため、明堂が完全に囲まれている。明楼の場合、桧巖寺跡の僧堂遺構の明楼では、明堂と接する部分から壁の痕跡が発見されなかったが、建長寺僧堂(図6)には、明楼と明堂の間に壁があるように見られる。また径山寺僧堂(図3)の場合、明楼が単なる内・外堂の連結通路ではなく、僧堂の内部全体が一連の儀式場として用いられており、やはり明楼は明

堂と区分された内部空間となっていたように見られる。これを考慮すると、桧巖寺跡の僧堂遺構における明楼部分は疑問として残る。

一方、建仁寺・東福寺・天竜寺僧堂のように、堂の四面全体に庇を廻らせ、そのうち前面の庇空間を外堂として使用するの、日本独自の方法であると考えられる。

5. まとめ

以上の考察から、韓国の桧巖寺跡で仏殿跡の西側で発見され、現在まで「修造記」に記されている「西僧堂」と「穿廊」、という2棟の建物に比定される遺構は、内堂と外堂及び明楼と明堂を備えた一棟の典型的な禅院の僧堂の遺構であることが明らかになった。

桧巖寺僧堂は、それが再建された当時の中国と日本における禅院の僧堂と、共通している点が多くみられ、日本と同じように中国の禅院建築の影響が強かったと考えられる。僧堂の位置と向き、内堂・内単と外堂・外単の区分とその機能の差異およびそれによる単の奥行の差異、明楼と明堂の存在などがそれである。これはまた、桧巖寺跡は、14世紀末に瀬翁が再建した伽藍の状況を多く保持していることをよく示す。

以上が、当時の日本と韓国の禅院で尊重された僧堂の制度の側面であったが、同時に、各国で可変的に受容された側面もある。その中で、最も注目されるものは、桧巖寺跡の僧堂遺構のオンドルである。これは、中国から導入された寺院建築が、韓国固有の生活様式に基づいた暖房方式を取り入れ、自国化した結果である。このような現象は、当時の韓国および日本の禅院建築について研究する上で、考慮に入れるべき重要な点であろう。

オンドル以外に、僧堂の周りに庇がないことと明堂の形も、中国・日本の禅院の僧堂と異なる点が挙げられる。また、明楼と明堂は、中国と日本の禅院の僧堂において、必須のものではなく、僧堂の規模とも関係がなかったとみてよい。さらに、僧堂の四面全体に庇を廻らせ、そのうち前庇部分を外堂として使用する方法は、日本独自のものであると考えられる。

一方、「大宋名藍図」を通して、径山寺の僧堂における一人当たりの単位の幅が2.5尺であることが明らかになり、これによって僧堂(内堂)における収容可能人数の推定と比較が可能になった。またこれから禅宗寺院の規模を想定することもできよう。

韓国の桧巖寺跡は、それが再建された高麗時代のみならず、当時の東アジアで盛んだった禅院伽藍の具体的な姿が保持されている唯一の遺跡である点で、東アジアの禅院建築史においても極めて重要な意味を持つ。従って、これからも東アジア建築史の視点から、継続的に研究を進める必要がある。

注

注1) 高麗時代の寺院建築に関する既往研究には、張慶浩「高麗伽藍の研究」(『考古美術』175-176号、韓国美術史学会、ソウル、1987年12月、pp. 91-125)、金奉烈・朴鍾進「高麗伽藍の構成形式に関する基礎的研究」(『大韓建築学会論文集』5巻6号通巻26号、大韓建築学会、1989年12月、pp. 27-36)、李廷国「高麗時代寺刹建築の空間構成に関する研究-文献研究を中心に」(漢陽大学大学院建築工学科博士学位論文、ソウル、1997)、李廷国「古代及び中世仏殿の利用方式に関する研究-文献研究を中心に」(『建築歴史研究』12巻2号通巻34号、韓国建築歴史学会、ソウル、2003年6月、pp. 7-19)などがある。

注2) 『新增東國輿地勝覽』卷十一「楊州牧、仏宇、桧巖寺」には「高麗王子、僧円鏡手跡、在南樓東西壁、及客室西偏小樓間。寺僧云。大定甲午歲(1174)、西部叛、西北路梗。時金使至、從春州路。導迎金使、入寺禮像設、訖聚觀書。一人曰。貴人筆也」と記されている。

- 注3) 王師は、高麗時代の光宗代(950-975)に制定された制度で、国師とともに国最高の僧職であり、王師は王の顧問格、国師は国の顧問格であった。
- 注4) 瀬翁の中国(元)留学および松巖寺再建関連内容は、「瀬翁和尚行状」に対する許興植氏の分析を参考した。許興植『高麗に移した印度の灯火』(一朝閣、ソウル、1997)
- 注5) 『高麗明實集』巻三「天宝山松巖寺修造記」：普光殿五間南面 殿之後説法殿五間 又其後舍利殿一間 又其後正庁三間 庁之東西方丈二所各三楹 東方丈之東羅漢殿三間 西方丈之西大藏殿三間 入室寮在東方丈之前面 西 侍者寮在西方丈之前面 東 説法殿之西 日祖師殿 又其西日首座寮 説法殿之東日影堂 又其東日書記寮 皆南面 影堂之南面西日香火寮 祖師殿之南面東日知藏寮 普光殿之東少南日旃檀林 東雲集面西 西雲集面東 東雲集之東日東把針面西 西雲集之西日西把針面東 穿廊三間接西僧堂 直普光殿正門三間 門之東廊六間接東客室之南 門之西悅重寮七間折而北七間日東寮 正門之東面西五間東客室 其西面東五間日西客室 悅重寮之南日観音殿 其西面東五間日浴室 副寺寮之東日彌陀殿 都寺寮五間南 其東日庫樓 其南日廊七間接彌陀殿 其北日醬庫十四間 庫樓之東十二間 庫有門 從樓而東四間 又折而北六間 又折而西三間缺其西直正門少東日鐘樓三間 樓之南五間日沙門 樓之西面東日接客庁 樓之東北向知賓寮 接客之南面東日養老房 知賓之東面西日典座寮 折而東七間日香積殿 殿之東庫樓之南日園頭寮三間西 殿之南四間日馬廄 凡爲屋二百六十二間 仏躬十五尺者七 観音十尺
- 注6) 『朝鮮王朝実録』によると、1402、1422、1436、1462年に各々修理記事が見られる。
- 注7) 金守温(1410-1481)『拭杖集』巻二「記類、松庵寺重創記」：頗聞築基不固 殿舍階砌 積以雜石 故創造未久 而屋已老 今欲開閣制度 罔改于旧 庭除所履 悉易熟石
- 注8) 金守温『拭杖集』巻二「記類、松庵寺重創記」には「殿舍間閣 無所更改 欄牆広狭 無所増損 而房樞門閤 益為之洞豁 塗壁丹雘 益為之絢煥 百餘年頽敗之旧寺 一朝變為重新之宝刹」と記されている。さらに、現在刊行されている一部の区域に対する発掘調査報告書にも、当時の修理による伽藍配置や各殿堂の形態の変化は見られないという意見が述べられている。京畿道博物館・畿甸文化財研究院『松巖寺 II - 7・8 団地発掘調査報告書』本文(2003)、p. 378
- 注9) 『朝鮮王朝実録』宣祖二十八年(1595)六月四日条によると、朝廷で松庵寺の旧跡にある燃やされた鐘で火炮などの武器を造ろうという論議がある。当時は文禄の役中であった。
- 注10) 許興植『高麗仏教史研究』一朝閣、ソウル、1997
- 注11) 京畿道博物館・畿甸文化財研究所「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料 7」2001 年 4 月
- 注12) 金東旭『韓国建築の歴史』(枝文堂、ソウル、1997)p. 149、李楨美「高麗時代住居建築に関する研究」(清州大学大学院建築工学科博士學位論文、2004)p. 185
- 注13) 京畿道博物館・畿甸文化財研究院「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料」2001 年 4 月
- 注14) 西僧堂遺構の場合、オンドルのゴレドゥック(고래등, オンドル床のグドルジャン(구름장, 温突石)を支えるため煙道左右に造った仕切り壁)は、主に平瓦を積んで造られており、一部矩形の石で造られているところもある。このような造り方は西僧堂以外の遺構でも見られ、松庵寺跡のオンドル遺構における一つの特徴でもある。一方その中では、後で増築された痕跡が明らかに見られる遺構もいくつかある。しかし、その場合、増築された部分は、すべて瓦ではなく、荒石で造られているという共通点が見られ、時代によるオンドルの造り方の差異が明らかに表されている。また仏殿跡の東北方の書記寮と見られる遺構には、創建後、2 回にわたって改造と増築がなされた痕跡が発見された。この遺構からもオンドル遺構が発見されたが、それは創建当時のものと認められた上、そのゴレドゥックも西僧堂と同様に平瓦を積んで造られている。京畿道博物館・畿甸文化財研究院「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料」2001 年 4 月、京畿道博物館・畿甸文化財研究院『松巖寺 II - 7・8 団地発掘調査報告書』2003)。
- 注15) 西僧堂遺構のオンドルと礎石との関係を見ると、ゴレドゥックは礎石に直接隣接して造られている。後にオンドルを設けようとなれば、礎石下部の基礎部分(積心)の一部を壊さなければならないため、建物の基礎が全体的に不安定になってしまう。京畿道博物館・畿甸文化財研究院「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料」2001 年 4 月
- 注16) 崔性鳳「松庵寺の沿革とその寺址調査-伽藍配置を中心に」(『仏教学報』9、東国大学校仏教文化研究所、1972 年 10 月)、金泓植「楊州松巖寺址の殿閣配置に関する研究-牧隱李穡の天宝山松巖寺修造記を中心に」(『文化財』24 号、文化財管理局、1991)、許興植『高麗に移した印度の灯火』(一朝閣、ソウル、1997)
- 注17) 京畿道博物館・畿甸文化財研究院『松巖寺 II - 7・8 団地発掘調査報告書』
- 注18) 京畿道博物館・畿甸文化財研究所「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料 7」2001. 4
- 注19) 無著道忠は『禪林象器箋』で、「僧堂、但在禪刹」と記している。
- 注20) 横山秀哉(『禪の建築』彰国社、1967)pp. 62-66
- 注21) 現存する「五山十刹図」は 20 種以上あるが、その中で比較적으로よく知られているものは、金沢大衆寺蔵の「五山十刹図」、京都東福寺蔵の「大宋

諸山図」、福井永平寺蔵の「支那禪刹図」、福井常高寺蔵の「大唐五山諸堂図」、仙台泰心院蔵の「大唐五山十刹之図絵」、妙心寺竜華院蔵の「大宋名藍図」などである。本論文では、張十慶「五山十刹図与南宋江南禪寺」(東南大学出版社、南京、中国、2000)に掲載されている妙心寺竜華院蔵の「大宋名藍図」を参考にした。

- 注22) 清規とは禪門における衆僧の則るべき規則である。唐の百丈懷海が大小乗の戒律を参照して禪門独自の規則を制定したのに始まる。駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『新版禅学大辞典』、2003
- 注23) この図は、食事の時の席を示しているものであり、板(版)は単の意味で、十六版首とは長連鉢状の単の教である。
- 注24) 普雨は恭愍王 5 年(1356)禪門で『勅修百丈清規』を施行することを建議した。姜好鮮「14 世紀前半期麗・元仏教交流と臨済宗」(ソウル大学大学院国史学科修士論文、2000. 2)、p. 56。それ以前の 1254 年(高麗高宗 41)には、高麗の分司大藏都監で『禪苑清規』が刊行された。『禪苑清規』は北宋代の 1103 年に宗頤禪師が著述した清規であり、現存する最古の清規である。崔法慧『高麗板板清規訳註』(伽山仏教文化研究院、ソウル、韓国、2002)、p. 1
- 注25) 『禪苑清規』第三巻「維那」には「堂中夏替換氈席及涼簾暖簾」と記されており、「氈」と「席」は単の敷き物、「簾」は窓と門に掛けるものである。また『勅修百丈清規』巻第六「節臘第八・月分須知」には「二月初一日僧堂内閉炉……四月……十五日……候天氣僧堂内下暖簾上涼簾……九月初一日……僧堂窓下涼簾上暖(暖)簾」と記されており、夏用の涼簾と冬用の暖簾の交換時期がわかる。
- 注26) 『禪林象器箋』「殿堂門・三條條」には「碧巖録第二十五則評云 諸人 若見得 與蓮花峯菴主同參 其或未然 三條條下 七尺單前 試去參詳看」と記されている。
- 注27) 『禪林象器箋』「座位門・單位」：凡言七尺單前者 非帳帷之長 謂自床後至前六尺 日本爲之一間 更加單板一尺 合成七尺也
- 注28) 『禪林象器箋』「座位門・床前三淨頭」には「勅修清規日用軌範云 床前一尺爲三淨頭 一展鉢 二安袈裟 三頭所向」と記されている。
- 注29) 南宋・元代の叢林では都寺・監寺・副寺・維那・典座・直歳の六知事と、首座・書記・歳主・知客・浴主・知殿の六頭首があった。駒沢大学禅学大辞典編纂所編『新版禅学大辞典』
- 注30) 『禪林象器箋』「殿堂門・外堂」：在僧堂外面 故曰外堂 又曰外僧堂 凡詣到客僧皆食於此 知客接不時賓客 故不食於内僧堂 而食於此 又凡知事不時有所辨 故並就外堂鉢位而食 勅修清規粥飯云 都監寺 維那 直歳 侍者等位 在外堂上間 知客 知浴 知殿 化主 堂主等位 在外堂下間
- 注31) 『禪林象器箋』「座位門・明棧」：在僧堂前也 僧堂廣深 又前有外堂 故堂内昏暗 乃於堂前外堂間 高架樓 開窓接明 此云明棧。横山秀哉、上掲書、p. 183
- 注32) 関口欣也「建長寺指図」(『神奈川県文化財図鑑-建造物篇』神奈川県教育委員会、1971)、p. 185
- 注33) 太田博太郎『社寺建築の研究』(岩波書店、1986)、p. 108
- 注34) 「東福寺伽藍境内之図」は、1843 年(天保 14)に描かれたものである。東福寺は鎌倉末の 1319 年(元応元年)の火災の後再建されてから 1881 年(明治 14)まで、大火に当たらなかったため、この図は南北朝-室町再建の伽藍状況がわかる史料とされるが、再建後、全く変化がなかったとはいえない。しかし、現存僧堂の様式と平面形態は南北朝-室町再建の様相とされており(太田博太郎、上掲書、p. 161)、図 8 の平面構成と単の配置においても、図 7・図 9 の建仁寺・天竜寺僧堂と一致している部分が多く、中世における僧堂の事例として挙げてよいと考えられる。
- 注35) 太田博太郎、上掲書、p. 257
- 注36) 鈴木智大、「中世五山叢林修行空間の変容」東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士論文、pp. 11-20
- 注37) 鈴木氏は東福寺僧堂の場合、「東福寺伽藍境内之図」に僧堂の梁行と桁行の全体寸法しか書かれていないため、横山秀哉の「禪の建築」掲載の実測図の寸法を利用した。また単の配列においても、「東福寺伽藍境内之図」では、北側と西側および南側と西側の壁に沿っている単が繋がっているが、他の三つの例と同じ配列と仮定して総長を計算した。
- 注38) 鈴木氏は一人当たり単の幅を 3 尺と 2 尺の二つの可能性を設定したが、その根拠は提示していない。しかし『禪林象器箋』には「三尺」であると書かれており(「殿堂門・三條條」：僧堂之床 每人座位 横占可三尺許)、中国の径山寺僧堂の場合は「二尺五寸」であった。
- 注39) 僧堂における単の配置方法は、横山秀哉、上掲書、pp. 179-180 参照。
- 注40) 横山氏は、日本の僧堂は中国とは異なり単上に畳を敷いたと述べているが、それに対する根拠は提示していない。横山秀哉、前掲書、p. 181
- 注41) 松庵寺が再建される頃の 14 世紀末の高麗では宋尺が营造尺として使われていた。なお一宋尺は 31.1-31.4cm である。尹張燮「韓国の营造尺度」(『大韓建築学会論文集』第 19 巻 63 号、大韓建築学会、1975. 4)
- 注42) 寸法は京畿道博物館・畿甸文化財研究所「現場説明会資料 7-楊州松巖寺址 3 次発掘調査」(2001 年 4 月)掲載の実測図に従った。また、外壁に沿っている単は、桁行単と梁行単が繋がっているが、ここでは日本の建長寺や天竜寺と同じであると仮定して計算した。
- 注43) 発掘結果をみると、内堂における桁行方向の増築は認め難い。京畿道博物館・畿甸文化財研究院「楊州松巖寺址 3 次発掘調査-現場説明会資料」2001 年 4 月

(2005 年 7 月 10 日原稿受理、2006 年 1 月 10 日採用決定)